

第1分科会

テーマ (一人ひとりの発達をふまえた保育実践)

会場 (沖縄ハーバービューホテルクラウンプラザ 彩海の間)

参加者数 (303人)

幹事：沖縄県 つばみ保育園

座長団：宮崎県 下長飯保育園 / 沖縄県 みなみ保育園

助言者：福岡県 新星保育園 / 沖縄女子短期大学 児童教育科

意見発表者：佐賀県 のぞみ保育園 / 大分県 裏川保育所 / 沖縄県 とよみ保育園

記録：沖縄県 津嘉山保育園



1. 意見発表趣旨

発表1 「テーマ：子供の育ちを保障する」

「発表園：佐賀県 のぞみ保育園」

研究の動機・ねらい

…子どもの世話をするより追われているという10数年前の保育状況(一斉保育)に自問自答の毎日をおくっている中、他園見学研修をきっかけに園内研修に重点を置きみんなで一人ひとりの発達をふまえた保育実践を行った。

研究内容

…食事・睡眠・排泄などの世話でコミュニケーションをどの様にとっていくか、又、その行為にどのような意味があるのかを考え、できる限り持ち上がりで3年間同じ担当にする。子どもの育ちを保障する保育実践の為、保育士の役割分担表を作成する。

結果及び考察

・毎日同じ人が同じように世話をすることで、一人ひとりに丁寧に関わることができ、情緒の安定や大人との愛着関係が育っている。

・日課に沿った大人の役割を表にしたことで要所要所への大人の配慮が出来て、偏ることがなくなっている。(乳児・幼児共)

・年齢にあった遊具が有り、自分で選びそれを自由に取り出せることにより、自分で遊びを見つけ出すことが出来る。

助言内容

.....発表者全員終了後に助言を頂く。.....

発表2 「テーマ：一人ひとりの発達をふまえた保育実践

食事を通して1、2歳児の育ちを考える」

「発表園：大分県 大分市立裏川保育所」

研究の動機・ねらい

.....乳幼児期の生活リズムの乱れや、生活経験の不足などによる子どもの気になる姿が増えてきた。今回の研究にあたり、大分市立の各保育所の子どもたちの姿を出し合い、その中で特に食事の場面で気になる姿が多く見られた。そこで、子どもたちの姿から気持ちの読み取りをして、より現状に即した援助及び支援のあり方を研究した。.....

研究内容

- (1) 大分市立公立保育所1.5園の共同研究とする。.....
- (2) 各保育所の実践記録を出し合い、それを元に子どもの気持ちの読み取りをし子どもと保護者への働きかけを考え実践に生かしていく。.....

結果及び考察

.....今回、子ども達の姿を実践記録にして見つめ直すことによって私たちが当たり前前だと思い、何気なくしてきた食事の援助の一つ一つの意味を改めて考えることが出来た。一口でも「自分で食べてみよう」と思わせる環境づくりを意識し食事の時間を大切にしていきたい。また、友達への興味や関心が出てくるこの時期、子どもの育ちを支えるのは子ども同士の模倣する力であると改めて感じた。お互いに共感し合い楽しく食事出来るようこれからも引き続き援助していきたい。.....この研究で「食べる」ということが、低年齢児ほど生活リズムや情緒の安定・安心できる環境づくり・保護者との信頼関係と深く関わっており、それらがうまく

かみ合うことによって生活が安定するという事を再確認した。

助言内容

..... 発表者全員終了後に助言を頂く。

発表3 「テーマ：子どもが遊び込める保育環境づくり

～個々の子どもたちへの遊びの保障～

「発表園：沖縄県 とよみ保育園 」

研究の動機・ねらい

.....旧「保育指針」では、子どもの遊びの保障は、「活動が豊かなものとなるよう計画的に環境を構成し、工夫して保育することが大切である」と謳われている。豊かな経験が出来る環境、人的環境としての私たち保育者自身はどうか、子どもたち一人一人の健やかな成長発達を援助するための保育環境構成に取り組みました。

研究方法

- (1) 毎月の園内研修を行い、保育環境、研究テーマについて共通理解を図る。
- (2) クラス会議を行い、コーナーの内容や設置方法について検討を重ねる。
- (3) 保育所保育指針や保育の専門書または、参考文献から学ぶ。
- (4) 県内外の研修や視察研修に参加したり、講師を招いての職員の研修を行う。
- (5) 保護者へのアンケートをとる。

研究内容

.....・安心して過ごせる場所として、.....家庭的で落ち着ける場所.....自分で手を伸ばして遊べる場所.....明日も行きたくなる場所づくりを目指し、2歳児クラスにて遊びこめる環境としてのコーナーあそびを取り入れた。

結果及び考察

-・子どもの発達に見合ったあそびや環境を整えることで、子どもたちが自主的に活動していく姿が見られた。
-・保育理念に基づいた物的環境、人的環境に配慮したコーナー保育を見通して、今後も一人ひとりの発達を見据えた連続性のある保育を実践していきたい。

助言内容

一人ひとりのきめ細かい対応が必要であり、家庭全般を見ながら保育をしていかななくてはならない。集団での個性が生まれることを大切にしていく。

今は、親の養育力が乏しくなっているので、親を保育士と一緒に育てることが必要である。親が親らしく育っていくことを支援することもこれからは望まれる。

食事の食べさせ方、声かけ、手遊び等を実際に経験してもらおう。

一人ひとりの発達を踏まえた保育実践とは、三者の発達である。子どもを軸として、保育士は専門性、実践。親は子どもへの丁寧な関わりをしていくことで、皆それぞれが発達していく。三ヶ所の共通点として実践を深く追求している。

また、自分達の保育を外に開いていくことで、他者、他園に見てもらえるようになってきている。子ども達のことを丁寧に一人ひとりを見ていく姿勢がすばらしい。

それぞれが園へ持ち帰り、小規模で少人数のゆとりある園だけが可能ではなく、大規模な保育園でも大きな集団となった場合、工夫し連携をとることで一人ひとりを大切にできる保育が可能である。

保育士は、発達観・子ども観をベースとして、保育観を構築してほしい。

2. 討議内容

討議のテーマ

- (1) 乳幼児期における食育とは？
- (2) 子どもが遊び込める保育環境づくりとは？
- (3) 子どもの育ちを保障するとは？

討議のまとめ

ほとんどの参加者が初めて経験する討議方法であったため、戸惑いもみられたが、助言やアドバイスを受け、参加者全員によるグループ討議が活発に行われた。

作業時間内に個人作業、グループ討議をまとめ、6グループから発表があり、参加者全員で共有することができた。

最後に助言者から「今、皆さんが討議した意見を出し合い、考え合い、意見を皆でまとめる事を子どもたちも遊びを通してやっているのですよ」と話されました。

その他

「K」法によるグループ討議を行った。

